

共同体感覚＝愛の「愛」と「関係」ということについて

香川三六（東京）

要旨

キーワード：

はじめに

アドレリアン第5巻第2号 79P～85Pに掲載されている野田会長の「共同体感覚の諸相」と題する論文は、第8回日本アドラー心理学会での基調講演の記録とのことであるが、これを読んで大へん興味深く、かつ、大いに啓発された。これからの治療に一本芯が通ったと感じた。

さて、その論文の一節に次のようなところがある。「その足りない『あるもの』のことを、アドラーは『共同体感覚』というはなはだ不適切な術語で呼び、彼の弟子のドライカースは『横の関係』というこれもまた不適切な術語で呼び、私は『しあわせ』とか『愛』とかいうもっとも不適切な術語で呼ぶのです。」続けて、「その『あるもの』は個人のあり方であって、まったく同時に関係のあり方です。個人と関係は不可分だからです。」

以上のなかにある「愛」とは一体何なのか、どういうことが「愛」と呼べるのだろうか、について考えてみたくなった。というのも、愛ということばが一般的にあまりにも多岐にわたる意味合いで使われているし、また、不用意にも使われているように思うので、この機会にほんもの(?)の愛とそうではないものとの区別してみたくなったからである。

また「関係」ということばが、野田会長の論文や講話に使われるようになったと感じるので、哲学的な根拠があるにちがいないと調べていたら適当な文献に出会ったので、併せて照会することにした。

I. 愛について

a. 愛の諸相（この項では、ほんもの(?)の愛、共同体感覚＝愛の愛は「愛」とカッコつきで表わす）

まず、「愛」とは考えられないのに愛と呼ばれるものから例示する。

(1) 夫婦間の愛の一例

「あの夫（妻）なしに私は生きていけない。なぜなら私はそれほどに彼（彼女）を愛しているから」という。愛と呼ばれているけれども、これは単なる依存に過ぎない。生きていくのに他者

が絶体必要であるとするのは、それは寄生虫に過ぎないし、奴隷であるといわざるを得ないだろう。こういう人達は、しあわせであることは望むが、自ら成熟する、精神的成長することに努力しようとは思わない。また、相手の成熟にも関心がない。あるのは、その人が自分をいかに満足させてくれるかどうかだけである。その人が自分に指示してくれたり保護してくれるだけ願うのであるから、その人が自分の命であり酸素なのである。相手を支配者にさせるから、支配者もまた服従者・奴隷を必要とし、奴隷なしには生きていけなくなり勝ちとなる。

この関係は全くの「縦」関係であり「愛」とはいえないのは勿論であろう。

(2) 親子間の愛一例

子どもの精神的成長—自分のことはきちんと責任をもって生きる—ないし、自立を妨げる、過保護・過干渉などに明暮れしている母親に少なからず接してきた。その母親たちはきまって「私は子どものために思ってそうするのです。私はこの子をこの上もなくホントに愛していますから」という。

谷口隆之助（故人）という心理学者は、くちうるさい母親の心理を次のように分析していたのを憶えている。

自分は子どものことを心配し、愛しているからこそくちやかましくするのだと信じている。しかし、実際にはその親の深く抑圧されている人生そのものに対する敵意がくちやかましきという形で無意識に子どもに振り向けられているのだ、くちやかましいのは、真の意味で愛しているのではなく、本当は子どもを愛し得ないでいるために、その償いとしてくちやかましくなるのであり、実は敵意の擬装である。それゆえに、しばしばとげとげしい口調になり敵意を含んだ言い方になりながら本人はなお子どもを愛しているからと言い訳する、というのである。私もそうした母親と接しているうちに、母親本人が悩みや不幸について語り出すことをよく経験した。愛の名をかりた本人の人生へのうっぶんばらしをしているに過ぎないのかも知れない。子どもはいい迷惑であると思う。

母親はえてして子どもを自分の所有物か、自分の延長のように考える人がいるように思う。10ヶ月もおなかにいたし、乳児のときには一体感が強いからであろうか。ものや延長と考えるのは一種のナルシズムといえる。そういう人には共感ができない。共感とは、他者の感じていることを感じる能力、相手のおかれていた状況・考え方・関心に対等な人間として関心を持つことである。共感できない「愛」なぞあり得ない。

子どもを全く別の人格を持った人間、自分とは全く別のアイデンティティーの持主であることを認めないという、そういう信頼もない。自己受容も信頼感もないから「愛」ではない。

(3) 男女間の愛（恋愛）

男女間の愛を恋愛という。恋に落ちると相手を愛しているという。恋は主観的で愛の経験として強烈に体験されるので「愛」の一つだと錯覚し易い。恋愛には他の愛とことなるいくつかの特徴がある。その一つは、恋愛は性と結びついた経験であることだ。意識的か無意識的かは別として性的動機が必ずあるということであろう。もしかしたらそれは種の保存のための神の摂理かも知れないとさえ思われる。第二の特徴は、それが一時的なものであるということであろう。永遠の結び付きを願って幸せに暮らすことを願うのであるが、お互いに求めるものがすべて満たされるわけではないから、やがて恋は冷える。愛だと思っていたものがそうではなかったことに気づく。

次に、愛の相手が特定の人に限られるということであろう。「愛」が多くの人に及ぶのと対称

的である。同時に多くの人に恋することはまずない。

また、恋は狂気とか、正気の沙汰ではないとかいわれる。カルメンの主人公ドン・ホセやマノン・レスコーのシュバリエのように、一切を犠牲にしてもという恐しい狂気性がつきまとうことも多い。これは小説の上だけのことではない。これらの小説に共感を覚えるのは恋のなかにたしかにそういう要素が潜んでいることを経験として知っているからであろう。自己理想はついに達せられることはないのである。

以上に思いつくままに恋愛の特徴について述べてきたが、これら特徴が、恋愛が「愛」ではない理由になっていると思う。ただ、夫婦間・親子間で述べたような愛よりも「愛」に近い点があるようにも思う。それは、相手の幸や精神的成長を願うところがあるからかも知れない。

次に全く趣を代えて、佛教では愛をどうみているかについて述べる。

(4) 佛教では

佛教でも愛という文字が使われているが、どんな意味を持つのかについてしらべてみた。佛教では二つの意味に使われている。一つは梵語プレーマを訳した愛で、愛には汚れた愛と汚れなき愛の二種がある、前者は貧で、後者は信であるとされている。あるいは、欲愛と法愛とがあり、欲愛とは食欲であり、法愛とは一切衆生を慈愛する慈悲心としている。

もう一つは、梵語トゥリシュナーを訳した愛で、貧り執着することとされている。これはプレーマの前者の意と同じである。

トゥリシュナーは、渴愛とも訳されている。これら二つの梵語の意味を総合すると、佛教では愛という語を二様の意味で使っているわけである。一つは法愛で、これは正に「愛」そのものというべきものである。今一つは渴愛という意味だからもとより「愛」ではない。渴愛は煩惱と同義語である。煩惱は、衆生がその心身を煩わせ、悩ませ、かき乱し、惑わせ、汚すところの精神作用の総称である。衆生は煩惱によって業を起し苦しみを受けるとされている。それ故に、煩惱を断じて（解脱という）さとりを得るのが佛教の目的である。解脱する方法論がいろいろと示されているのである。ちなみに、解脱したものを「阿羅漢と呼び、阿羅漢が更に菩薩行を行って菩薩・佛になるとされている。また、小乗佛教は解脱することを目的とし、大乘佛教は、菩薩・佛となって衆生を済度することを目的とすると大乘佛教者はいう。

もっとも古い經典の一つに「法句経」（ウダーナヴルガ）（ダムマパダ）があるが、そのなかにも、愛欲品と受身品とがあって、受身品が「愛」に相当する。

また、日本人の造ったお経である「修証義」（明治 20 年代「正法眼蔵」を手本として曹洞宗でつくられた）には、「愛語」ということばがでてくる。（原文のまま旧仮名使い）

「愛語」といふは、衆生を見るに、先づ慈愛の心を発し、顧愛を施すなり、慈念衆生猶如赤子の懐ひを貯へて言語するは愛語なり。徳あるは讚むべし、徳なきは憐むべし、怨敵を降伏し君子を和睦ならしむること愛語を根本とするなり。面ひて愛語を聞くは面を喜ばしめ、心を楽しくす。面はずして愛語を聞くは肝に銘じ魂に銘ず、愛語能く回天の力あることを学すべきなり。」

愛語をアドラー的というなら「勇気づけ」といえるであろう。これは「愛」である。

(5) キリスト教では

キリスト教では、聖書のなかにも愛ということばが、ひんばんに出てくる。「汝自身を愛するが如くに、隣人を愛せよ」ということばが一番人口に膾炙されている。隣人というのは恐らく人

類全体を表わしていると思う。

共同体感覚の共同体は、過去現在未来の生とし生きているものに限らず、宇宙的広がりすべてのものを含むという。

キリスト教のいう愛は「愛」にちがいなからう。

(6) フロムは

新フロイド派の代表者エーリッヒ・フロム(1900-1980)はドイツに生まれアメリカに帰化したが、彼は愛を次の二つに分類している。(巻末の引用書籍より)

「愛といったときに、実存の問題にたいする成熟した答えとしての愛のことを指しているのか、それとも共棲的結合とでも呼びうるような未成熟な形の愛のことを言っているのか…。共棲的結合の生物学的な形は、妊娠している母親と胎児の関係に見られる…。共棲的結合の受動的な形は服従の関係である。…自分で決定をくだす必要がないし、危険をおかす必要もない。決して一人ぼっちにはならない。…共棲的結合の能動的な形は支配である。…支配者も服従する人に依存している…」(以上原文のまま)

フロムのいう共棲的結合の愛は、正に「縦」関係の愛であって「愛」ではない。前者の愛については、次のように述べている。(文責筆者)

愛は能動的な活動であって、受け身の感情ではない。愛は何よりも与えることだが、犠牲といったものではなく、与えることは自分の持てる力のもっとも高度な表現であるし、それは喜びをおぼえるものだ。与えることが自分の生命力の表現であるとするのである。そして与える行為のもっとも重要な部分は、物の世界にではなく、人間的領域である。自分の喜び・興味・理解・知識・ユーモアなど自分のなかに息づいているものを与え、他者の生命感を高め、他者を豊かにすることだ。

そうすれば、他者のなかに何か生まれ、その生まれたものが自分にはね返ってくる。与えることは他者をも与えるものにする。そして喜びを分かち合うのである。愛とは愛を生む力である。

更に、重要なのは自分自身の愛に対する信念である。他者のなかに愛を生むことができると信ずることであるとも述べている。

これこそ正に「愛」というべきであろう。

(7) AIA(Adventure In Attitude)では

AIA というプログラムでは、愛について次のように分析している。(原文のまま)

「光がプリズムを通して美しい色に分解されるように、愛という感情も、いくつかの特徴に分けられるという。たとえば、それは、謙虚・優しさ・礼節・無私・誠実といったものだ、というわけで、AIA では、愛は、理解・忍耐・謙虚を意味することになったのです。その後、信頼が加えられ、後にこれは、自信と信頼に分けられました。また、希望も加えられ、これが後に先取りと期待になったのです。」「…この期待も、まさしく愛の始まりといえるでしょう。」「…この愛なくしては、ただのエゴイズムに終わってしまうでしょう。人生の成功とは、人のためになる目標を設定し、それを達成することにあります。」「…お金も受け、それを使って、人々の問題を解決し、喜びをわかち合うときにはじめて意味を持つのではないのでしょうか？」

以上で、愛の諸相を終るが、まだまだ愛といわれているいろいろのものがあろうと思う。

ところで、この文章を書こうとした動機は野田論文にあったが、愛とは何かを気にかけてたまたま書店で本を見ているうちに、「愛の定義」という小見出しのある本をみつけたのがもう一つの動機であった。その定義を紹介する。

b 愛の定義

「愛と心理療法」の著者M・スコット・ペック（アメリカの精神科医）は、次のように述べている。

「愛の不思議を示すひとつの事実は、私の知る限り、誰も本当に満足のいく愛の定義に到達したことがない、ということである。何とか説明するために、愛は、エロス・フィリア・アガペ、完全な愛と不完全な愛などの、様々なカテゴリーに分けられてきた。だが私は、愛の定義をひとつだけに限りたい。もちろん、ある点で、あるいはいろいろな点で、それが不十分な定義であることは承知の上である」と前おきして次のように定義している。

「愛とは、自分自身あるいは他者の精神的成長を培うために、自己を拓けようとする意志である」と。

そして、この定義を解説しているのであるが、私はそれを含めて私見をまじえながらその考えを述べることにする。

先ずこの定義の気に入った点は、この定義が目的論的であることである。すなわち、愛は自他の精神的成長を目的としている。次に、自分自身が精神的に成長することによってのみ他者の成長をはかれるし、他者の成長をはかることによって自分自身が向上できる。そういう行為を愛というのだという点である。つまり自己を愛することと他者への愛を同一視している。いいかえれば、自分自身を愛するものが他者を愛し得るし、他者を愛することによって、より自分を愛することができるという、いわばスパイラルのような関係をいっていることである。次に、自分を成長させるためには努力が必要で、もう一步踏み出すことで、愛は努力なしではあり得ないとしている。

もう一つ、愛は意志であると言っているのが目につく。

愛は感情であると考えている人が多いと思うが、彼は意志だと定義している。それは欲求ではなく、欲求と行為の間にあるずれを超越するために意志ということばを用いたと本人は言っている。欲求は必ずしも行為に移されるとは限らない。意志は、行為に移されるだけの強さをもった欲求だとも述べている。愛したいという欲求だけでは愛ではないとするのである。愛とは、愛が行うところのものである。それは意志の行為、つまり、意図でも行為でもあるものである。意志には選択が含まれる。愛することを選ぶのである。どんなに愛していると思っても実際に愛していないのなら、それは愛することを選ばなかったからであるとも述べている。

ここまでいうのならなぜ愛は行為であると定義しないのであろう。どんなに意志があっても行為しなければ愛は伝わらないように思う。行為といいきれないのには何らかの躊躇があるのだろうか？

行為というのは、そのねらいが、達成すべき目標が、自分の外側にあるし、自分が目的になっていないということかも知れない。

別の項で、著者は、愛は感情ではなく、行為ないし働きであると述べているのだが、定義では、意志であると言っているのはよくわからない点である。

フロムは、その著書のなかで次のように述べている。

愛とは、愛する者の生命の成長を積極的に気にかけることである。この積極的な配慮のないところに愛はないと。

また、次のようにもいう。

愛とは愛を生む力であり、愛せないということは愛を生むことができないことだ。

愛は人と他者とを隔てている壁を打ち破る力であり、人と人とを結びつける力である。愛においては、二人が一人になり、しかも二人でありつづけるというパラドックスが起こる。

愛は能動的な活動であり、受動的な感情ではない。そのなかに「落ちる」ものではなく、「みずから踏みこむ」ものである。愛の能動的な性格を、わかりやすい言い方で表現すれば、愛は何よりも与えることである。

それはともかく、ペックの愛の定義は、フロムの定義とともに、「愛」以外の何物でもない。共同体感覚と相容れるものであると思う。

「愛について」のおわりに

おわりを書きかけていたところに、テレビニュースで、ビックリするような報道をした。黒人のエイズにかかっている母親が、子どもにエイズをうつすために腕に噛みついた、なぜと聞くと、私はこの上もなくこの子を愛しているからという答えが返ってきたというのである。何たることであろうか、こんな愛し方があるとは。愛ということばはこんな使われ方もすることばなのである。共同体感覚とは全く正反対のことである。

さて、本文の愛の定義のところ、愛は行為であるといわんばかりのことを書いたが、愛と同義語としての「共同体感覚」が行為であるというのにはいささかためらいがある。共同体感覚＝愛の愛には、幅の広いというか範囲の広いというか、そういう意味合いが含まれているように思う。すなわち、共感し、意識し、思考し、選択し、と行為に至るまでのすべての心の動き（プロセス）を包含したことばのように思うのである。そしてそれが行為されなければ、世界に影響を与えることはない。ここでの行為とは、態度・ことば・行動を指す。

こういった幅の広い解釈、自己受容・信頼感・貢献感という共同体感覚の中味に加えて、それが発現されるための働き（プロセス）を包含させる考え方があがあるが、諸賢のご批判をいただきたいと思う。

本文を読み返してみて、カウンセラーとかセラピストの資質としてその共同体感覚の豊かさの程度が、治療効果に及ぼす影響を考えざるを得ないことをあらためて痛感した。ないものや乏しいものは与えられない。野田論文に治療とはクライアントに不足している共同体感覚を加えるというか補うことであるというような意味のことを述べられているが、治療者にそれが不足していれば、治療することが難しいということである。だから、カウンセラー講座を二分して、アドラー心理学を学んだ上で、ヨコの関係性を体得した人だけに養成講座を受講させるということにしたのであろう。

何にしても、愛について学んでよかったと思う。諸賢のご批判を得られれば幸である。

引用文献

- 愛と心理療法 (The Road Less Traveled) M・スコット・ペック、創元社、訳；氏原寛・矢野隆子
- 愛すること (The Art of Loving) エーリッヒ・フロム、紀国屋書店、訳；鈴木晶、佛教学辞典 法蔵館

II . 関係ということについて (文責筆者)

デカルト (フランス、1596-1650) は、「われ思うゆえにわれあり」といった。また、パスカル (フランス、1623-1662) は、「考える葦」といった。これらは、人間を、「私」という立場でとらえる、単なる思惟する自由な主観としてとらえたものである。これに対して、キルケゴール (デンマーク、1813 ~ 1855) は、私というのは単なる思惟する自由な主観ではなくて、自と他の間の「関係の束」であるというのである。いかえると「私」とは、他者と自分の関係によって作りあげられるものである、という考え方を明確に打ち出したのである。

この「関係」としての「私」という考え方を、もっと徹底したのがヘーゲル (ドイツ、1778 ~ 1831) である。ヘーゲルの言ったことに「自己意識の自由」というのがあるが、この「自己意識の自由」とは、人間は誰でも必ず、自分は何ものにも依存意識がなくて自立しているという意識、つまり「自分は自分だ」と意識していたいという本性をもっている。しかし、この「自由意識の自由」は、他者との関係のなかではじめて実現されるのだ。だから人間は他者との「関係」のなかにあるのだというのがヘーゲルの考え方である。この考え方は、近代的な自己という考え方の基本となってきた。デカルトを超えたのである。

アドラー心理学の基本的な前提条件として、対人関係が重視されているのは、この近代哲学の影響を受けているのかも知れないと思う。人間行動には必ず相手役がいるという考え方は、治療計画を設定するとき大いに役立つ。登校拒否などの場合、この考え方にもとづいた治療が効果を示すことを度々経験した。

フロイト派のE・H・エリクソンは、アイデンティティーという概念を提唱した。このアイデンティティーという概念は、自己同一性とか自己統一性とかと訳されているが、よくわからない。ヘーゲルの「自己意識の自由」という考え方ととてもよく重なっているといわれているので触れてみたいと思う。

アイデンティティーという概念には、二つのポイントがあるように思う。その一つは、自己受容あるいは自己評価が高いということ、或いは、他者よりも優れたライフスタイルだとか、他者とは違った能力があるとかいうことなどの意識である。

今一つは、貢献感がある、家族のなかで役に立っている、社会的役割を果しているということであると思う。つまり、自己評価が高く貢献感があるという意識によって、「私が私である」というアイデンティティーを得る。そして、このようなアイデンティティーが確認できないと、人間は不安になり、不全感を持つということである。つまり、「私が私である」という確信が持たなくなる。人間のアイデンティティーは、自己と他者 (社会) との関係においてはじめて保証される。私とは関係であるという考え方は、人間が社会的存在であることを強調する。

フロイトは、他者との関係ではなくて、意識と無意識という自分のなかに関係があるとも考えることもできる。つまり、フロイトは、他者との関係が「私」であるという考え方ではなく、意識的な私と意識できない私との関係が私であるといっているとも考えられる。

この二つの概念をドッキングさせる概念をとなえるのが岸田秀の自我論である。この理論には次の4つのポイントがある。

- (1) 自我というのは「欲望」である、それは自我を安定させようとする欲望である
- (2) 欲望というのは「私は…である」という自己認識を他者が認めることによって自分が安定する
- (3) 人間は自我の安定している他者を見て欲望をつくる
- (4) しかしその欲望を達成しても安定はしない。所詮それは幻想である

おわりに

愛は関係であるということであろう。

引用文献

- 自分を生きるための思想入門、竹田青嗣、芸文社

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載